

日本スポーツ理学療法学会に関連する国内外の動向

運営幹事 赤坂清和

2019年5月10日

【はじめに】

2013年日本スポーツ理学療法学会は日本理学療法士協会のもと開催されてきた日本理学療法学術大会を専門分野ごとに分科する形でスタートした。

世界理学療法士連盟 World Confederation for Physical Therapy (WCPT) のサブグループの1つとして International Federation of Sports Physical Therapy (IFSPT) がすでに2003年に設立されていること¹⁾、オリンピックパラリンピックの開催地として東京が立候補している最中における、日本におけるスポーツ理学療法学会の船出となった。

なお、IFSPTの日本の加盟は2011年WCPTアムステルダムにおけるIFSPT General Meetingにて日本理学療法士協会のスポーツ理学療法部門として正式に加盟した。また、2020年東京オリンピック・パラリンピックは2013年9月にブエノスアイレスで開催された第125次国際オリンピック委員会 International Olympic Committee (IOC) において決定され、同委員会において、現在の第9代IOC会長となったトーマス・バッハが選出されている²⁾。

【スポーツ理学療法の国際的動向】

2015年11月20-21日に第1回IFSPTはスイス・ベルンにて、Return to Play (RTP) をテーマとして、当時の異なるスポーツ競技及び競技レベルに対するRTPのエビデンスとガイドラインが提示され、スポーツ理学療法士がアスリートの外傷や手術後にできるだけ高い競技レベルに復帰するため重要な役割を果たすことが再認識された。すべての講演はYouTubeにて閲覧することができるので、興味がある方は視聴するとよいだろう³⁾。なお、IFSPTは各国のスポーツ理学療法学会、British Journal of Sports Medicine (BJSM) との共催という形で開催されることになった。

第2回IFSPTは2017年10月6-7日北アイルランド・ベルファストにて開催された。学会テーマは、Optimal Loading in Sportであり、このときのOptimal Loading (至適負荷) は、骨、筋、靭帯、腱、神経などにおける外傷からの復帰する際に加えられる最適な負荷についてそれぞれのセッションにて検討された他、負荷の管理、医療施設とフィールドにおけるリハビリテーションの教訓や血流制限を考慮した運動至適化など幅広いトピックについて講演が行われた。

2019年10月4-5日に第3回IFSPTがカナダ・バンクーバーにて、High Performance to Clinical Practice をテーマとして開催される⁴⁾。これは各国で High Performance Center が開設されてきているが、プロスポーツやこれらの施設などで蓄積されたデータなどをもとに臨床への応用について詳細に話し合われることが期待される。

【日本スポーツ理学療法学会の動向】

日本スポーツ理学療法学会は、2013年6月に設立され、代表運営幹事には日本福祉大学の小林寛和先生を満場一致にて選出した。2014年11月30日に第1回学術集会を群馬大学の坂本雅昭先生を学術集会長、テーマを「スポーツ理学療法の現状と学術としての確立」として東京工科大学にて開催した。

第2回学術集会は、2016年1月9日日本鋼管病院の川島敏生先生を学術集会長、テーマを「スポーツ理学療法における評価の再考」として、第1回学術集会同様、東京工科大学にて開催した。このとき、日本スポーツ理学療法学会学術集会として主題演題「スポーツ理学療法における評価」と指定演題「成長期スポーツ外傷・障害の評価と理学療法」を初めて募集し、それぞれ7演題と6演題が発表された。

第3回学術集会は第51回日本理学療法学術大会として札幌コンベンションセンターおよび札幌市産業振興センターにて、2016年5月27-29日に開催され、学術集会長は広島大学の浦辺幸夫先生が務めた⁵⁾。このとき、IFSPTの国際スポーツ理学療法士の水準を理解するために、英国 Brighton University より Colin Paterson 先生を招聘しご講演いただいた。また、東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて組織委員会メディカルディレクターで早稲田大学の赤間高雄先生に理学療法士の役割と期待についてご講演いただいた。

第4回学術集会は、第52回日本理学療法学術大会として幕張メッセにて2017年5月12-14日に開催された⁶⁾。学術集会長は札幌医科大学の片寄正樹先生が務め、テーマは「スポーツ理学療法とスポーツ科学の融合」とし、100演題を超える演題が応募された。

第5回学術大会（第53回日本理学療法学術大会）は、2018年12月8-9日に日本大学文理学部百周年記念館にて「スポーツ理学療法の可能性」をテーマに開催された。学術大会長は小林寛和代表運営幹事が務めた。国際的なスポーツメガイメントの開催に備えて、スポーツ理学療法士の国際水準と現状課題を踏まえて、学問と職域の統合と求められるコンピテンシーについて、スポーツ医学会からのご意見を伺いながら、検討する良い機会となった。

第6回学術大会（第54回日本理学療法学術大会）は⁷⁾2019年12月7-8日に帝京平成大学池袋キャンパスにて、「大いなるレガシーを求めてー2020に向けたスポーツ理学療法の新体系ー」をテーマに、北里大学の渡邊裕之先生が学術大会長を務められる。さまざまな準備と将来に渡って引き継がれるスポーツ理学療法について活発な検討が期待される。

【おわりに】

本稿が、日本スポーツ理学療法学会および IFSPT を中心にスポーツ理学療法に関連する国内外の動向について理解が深まり、多くの方にスポーツ理学療法をご理解いただき、発展させていくための積極的な参加につながれば幸甚である。

【参考文献】

- 1) <https://www.wcpt.org/ifspt> (2019年4月26日閲覧)
- 2) <https://www.olympic.org/> (2019年4月26日閲覧)
- 3) <https://www.youtube.com/watch?v=TKTc2izUZzA> (2019年4月26日閲覧)
- 4) <http://ifspt.org/education/conferences/third-world-congress-of-sports-physical-therapy/>
(2019年4月26日閲覧)
- 5) <http://www.c-linkage.co.jp/jspt51/> (2019年4月26日閲覧)
- 6) <http://www2.c-linkage.co.jp/jspt52/> (2019年4月26日閲覧)
- 7) <http://jsspt6.dev.dewill.org/regist/> (2019年5月25日閲覧)